

若手の保育者がのびのびと育つ 温かい園の風土を根づかせるには

若い保育者の育成は、幼稚園と保育所の共通の課題となっています。希望や目標をもって保育の道を選んだ若い世代の向上心を支え、成長を促していくには、どのような園の環境が望まれるのでしょうか。聖心女子大学の河邊貴子先生にお話をうかがいました。

揺るぎない理念に基づく、風通しのよい人間関係を

若手のよさを認めて 向上心を引き出せる風土を

近年、若い保育者の離職率の高さが、多くの園の課題となっています。保育者という職業は、子どもの頃から憧れて就く人が多いものですが、どうしてすぐに辞めてしまうのでしょうか。

若手の退職理由として多いのが、職場の人間関係の悩みや体力的な問題です。しかし、若手ならではのこうした悩みは、今も昔も大きく変わりません。そう考えると、園側の変化にも目を向ける必要があるでしょう。

最近、新人がミスをしないうように、事前に本人が考える余地のないほど細かく指導する園が増えていくようです。背景には、昔に比べて園に対する保護者の要求が強まっていることもあるのでしょう。しかし、自分で考える余地を残しておかないと、次第に試行錯誤をやめて成長が止まりますし、目的を見失って心が疲れてしまいます。

細かく指導したくなる気持ちは理解できますが、若手ならではの一生懸命さや元気が園の雰囲気によい影響をもたらしていることを見逃してはいけません。そのようなよさを認めつつ、本人が自分から



河邊貴子

かわべ・たかこ
聖心女子大学文学部教授。東京都公立幼稚園で12年間教諭として幼児教育に携わった経験をもつ。2008年改訂の幼稚園教育要領解説作成協力者、中央教育審議会専門委員（初等中等教育分科会）などを歴任。著書に『子どもごころ—幼児が生きている豊かな時間』（春秋社）など。

「変わりたい」「伸びたい」という気持ちになるような温かい「風土」をつくるのが何より重要でしょう。

子どもを軸とした理念の共有で コミュニケーションを活性化

風土とは、土（地面）があり、そこに風がそよいでいるイメージの言葉だと思います。園にとっての「土」は保育の理念、「風」は人間関係の風通しと言えるでしょう。

園長が発信する理念が揺るぎないものとして共有されていれば、保育者の間に同じ方向を向いて力を合わせようという感情的なまとまりが生まれます。理念を改めて説明

する機会は少ないものですが、行事などでねらいを強調して伝えたり、園長等が保育をする姿を見せたりして、繰り返し感じ取ってもらえるように努めてください。理念が共有されていなければ、どれだけ人間関係がよくても、それは「仲良しグループ」に過ぎません。若い保育者も理念を十分に理解すれば、先輩の保育のねらいを察したり、厳しい指導を受けても納得して耳を傾けたりするようになるはずですよ。

保育の理念は、「すべては子どものために」といった子どもを見つめたものであるべきだと、私は思います。こうした理念が十分に浸透すれば、園内に子どもを軸としたコミュニケーションが生まれやすくなるでしょう。職員室で自然と子どもの話が始まるような雰囲気が理想的ですが、なかなかそうならないときは、園長のちょっとしたサポートが必要です。

園長が子どもの名前を出して印象的だった保育の場面について話したり、がんばっている保育者の話を聞いたりすれば、保育者間の会話のきっかけになるでしょう。

協同作業の場を設けるのもよい方法です。以前、私が勤めていた園では、子どもが帰った後、同じ年齢を担当する保育者が集まって保育室を掃除しました。3クラスの場合は、3人が一緒に3部屋を掃除して回るのです。すると、「このあたりで遊んでいた子どもたちが楽しそうだった」「この掲示物はおもしろい」などと、子どもや保育の話が自然と出てきます。面と向かって話すときに比べ、作業をしていると気軽

に話せますし、そういうときのほうが、構えていない分、指導を素直に受け止められるものです。協同作業は、草むしりや花壇整備、教材室の整理など何でもよいと思います。

若手の成長レベルを捉えて 視点を広げるアドバイスを

若手の保育者の指導時には、本人が直面する課題を意識してあげてください。誰でも最初は目の前の子どもの対応でいっぱいですが、経験を積むうちにまわりの子どもが見え始めます。「木」から「林」に目が向くようになったわけです。さらに成長すると林と林の関係に気を配れるようになり、やがて「森」、すなわちクラス全体を視野に入れて保育ができるようになります。若い保育者に初めからきっちり「森」を見るように求めても難しいです。その保育者は何が見えており、何ができないレベルかを園長が把握していれば、「その子どものまわりはどうなっているかをよく見てごらんください」などと、視点を広げるアドバイスができます。

誰でも経験の浅いうちは不安を抱え、自信がないものです。小さなことでもほめて認めれば、大きな支えになるでしょう。落ち込んでいるときには、子どもの良さや保育の楽しさなどを思い出し、原点に帰るよう促すとよいと思います。

そして、先輩が向上心を抱いていることも、若手が伸びる条件です。みんなが学び合って伸びようとする、そんな温かい風土のある園を目指していただきたいと思います。

保育者から見た 園の風土 体験談

園長の保育観がわかり 保育者が一つにまとまった

◎園長が保育観をしっかりと伝えている園は、保育者が一つになり、また自分の成長も感じることができます。私も若手のころ、園長が「一人ひとりが自信のあるものを発揮し、足りない部分は互いに補い合えばいい」と話してくださったことで、ほっとしましたし、みんなと協力しようという気持ちが強くなりました。（公立保育園・25年目）



「園長が守ってくれる」 安心感の中で私は育ちました

◎新任の時、園長から「思うとおりにはやってみなさい。責任は私がとるから」といっていただきました。その言葉のおかげで主体性が生まれ、失敗や成功がその後の糧になった気がします。また、悩みをじっくりと聞いてくださり、「一緒に考えてみましょう」と時間を惜しまず話し合ってくれた先輩方にも育てられました。（国立幼稚園・23年目）

